

# JAPIC NEWS

ジャピック  
財団法人 日本医薬情報センター (JAPIC)



# 2

# 2009

## Contents

■ 巻頭言		
「こころの会話」	(社)日本病院薬剤師会 副会長 佐藤 秀昭	2
■ インフォメーション		
好評発売中!「JAPIC医療用一般用医薬品集インストール版 2009年1月版」		4
2月刊行「JAPIC医療用医薬品集普及新版2009」		4
2月刊行「添付文書記載病名集」ver.2.1 (2009年2月版)		4
JAPICデータベースの雑誌情報に全著者の所属機関を収載します		4
「JAPIC-Q サービス」および「JAPIC-QPlus サービス」平成21年度の更新手続きについて		5
第37回医薬情報講座開催のご案内		5
医薬品情報ナビに海外添付文書情報などへのリンク先を追加しました		6
■ トピックス		
JICAインドネシア研修者来訪		6
臨床試験情報 (JapicCTI) の運営の経緯		7
■ コラム		
薬局薬剤師の職能とは	(株)黒沢薬局 黒澤 章	10
☆会員の声「元気づけられる大切な言葉」		
バイエル薬品株式会社 ファーマコビジランス 金本 裕美子		12
くすりの散歩道 No.20 くすり創りの楽しさ難しさ		
日本製薬工業協会 研究振興部長 岡崎 靖		13
外国政府等の医薬品・医療機器等の安全性に関する規制措置情報よりー(抜粋)		14
■ 図書館だよりNo.224 ■ 情報提供一覧		15

# No.298

## こころの会話

(社)日本病院薬剤師会 副会長 石巻市立病院薬剤部門長  
JAPIC評議員 佐藤 秀昭 (Sato Hideaki)



今日、「ふろ、めし、ねる…」などの単純な言葉で簡単に「こころ」が通じ合える時代ではないと実感している。動物社会にも、何かを伝えるための単純な声(言葉)があることが知られている。たとえば、ニホンザルは、「キャッキャッ」がいじめられたときの声、「ホウイ、フーイ」が仲間を呼び集めるときの声、「ガッ、ガッ、ガ」が怒ったときの声、「クエン、ケアルン」が警戒を知らせる声と言われている(科学のアルバム あかね書房)。

しかし、やさしさや思いやりなどの「こころ」を伝える声(言葉)は知られていない。おそらく、おたがいにからだを触れ合うことで、こころを伝えているのかな…と推測する。人が生きて行くなかで、人や動物、草木など言葉の会話が無くても、「こころ」を伝え合うことの大切さは、永遠に変わらないと思う。

草木にも、言葉が無くても「こころ」が通じ合うことがある。たとえば、この季節に庭の梅の木に声を掛けると、いつも語りかけてくれる。朝、「ウー寒いなー」と声を掛けると、小さなつぼみがさらに小さくしぼみ、「暖かいねー」と声を掛けると小さなつぼみが心持ち大きく、ニッコリ笑いかけてくれたように感じ、やさしい気持ちになる。自然界に生息している生き物に、「こころ」を込めてやさしく接すればやさしさが帰ってくる、ふと、そんな気がする。

愛犬「ユキちゃん」(秋田犬 ♀7才)との触れあいにも「こころ」の会話がある。早朝5時過ぎると、ユキちゃんは「散歩に行こうよ、起きて」とやさしく布団をノックする。「わかった、わかった、起きるよ、あと5分待ってね」と声を掛けると、いったん自分の布団に戻るが、数分後にまた起こしに来る。このやり取りを数回繰り返すと「いいかげん、起きろよ」と言わんばかりにドンドンと布団をノックする。「しょうがないな、起きるか」と声を掛けると、スリッパを口に銜え、尻尾をフリフリし、ユキちゃんの嬉しさが「こころ」に伝わってくる。毎朝、こんな「こころ」の会話を楽しみながら、ユキちゃんと総合運動公園(グランディー・21)を散歩し、四季折々の景色を楽しんでいる。これも数年かけてユキちゃんの信頼を勝ち得たことによるのかなと思う。

人と人、人と動物、人と企業などのかかわりは、「信頼」が絆になって維持されている。たとえば、人は企業を信頼し、多くの銘柄の中から、自分の好み、使い勝手、値段などを考慮して気に入った物を購入している(今、食品については、疑心暗鬼…)。すなわち、企業も長い年月をかけ、人の信頼を勝ち得ている。病院・診療所についても同じことが言える。病院・診療所は、人の生命に深くかかわる「医業」を提供する施設である。多くの患者さんが来院するには、患

者さんの信頼を勝ち得ることが最重要である。

当院(石巻市立病院)も開院し、早10年が経過した。この期間、基本理念である「市民に信頼され、市民が満足する医療の提供」の実現に向け、患者接遇、待ち時間、施設のアメニティなどについての「患者満足度調査」を実施し、患者さんの評価や満足度を把握し、問題点の改善や患者サービスの向上に取り組んでいる。また、職員の研修・教育にも力を入れ、明るく、楽しい、働きやすい職場を目指し、チームワークをモットーにしている。「こころ」にゆとりのある職場は、やさしさや思いやりのある「こころ」で患者さんに接することができ、患者さんの信頼を勝ち得ると確信する。すなわち、これからの「医療」には、ホスピタリティの導入が必要と考える。

今、最もホスピタリティが進んでいるのがザ・リッツ・カールトンである。最近、読む機会を得たザ・リッツ・カールトン日本支社長 高野登氏の「リッツ・カールトンが大切にしている サービスを超える瞬間」(かんき出版、2007年)に、「世界一のサービスを提供するホテルにする」という夢の実現に向け、①あたたかい、心からのごあいさつを。お客様をお名前でお呼びするよう心がけます。②お客様のニーズを先読みしおこたえます。③感じのよいお見送りを。さようならのごあいさつは心をこめて。できるだけお客様のお名前を添えるよう心がけます、という3ステップのサービスをすべてのスタッフに徹底実践していると言うことが書かれている。

このサービスは、日本人の「気配り、心配り」という言葉が当てはまる。気配りとは「意識をして気を配る、心づかい」ということで、つまり表面的なものということである。表面的という言葉を使うとあまり良い印象を受けないが、人間関係のすべては気配りから始まるといっても過言ではない。その後、人と人との関係が深まるにつれ「気配り」は「心配り」へと移行する。心配りとは「心から相手のことを考え、行動に移す」こと、つまり内面的なものである。すなわち、人は人より深く知れば、それだけ相手に配慮した対応を取るようになる。本来、日本人は、この「気配り」のところが慣習的に身

に付いている、そのことで「心配り」への移行をスムーズに行うことが可能である。そして、この心配りへの移行こそが「感動できるサービス」につながるものと考え。医療に、このホスピタリティを導入することにより、院内のコミュニケーションが深まり、より質の高い安全な医療の提供が可能になると考える。

年末、この「気配り、心配り」をテーマにしたような映画を見た。映画のタイトルは忘れてしまったが、ストーリーは単純で、会館の職員が会場の予約をダブルブッキングしてしまい、そのことを解決するまでの人間模様を描いた、こころがほのほのと暖かくなる映画であった。登場人物として、ニートの子供とその母親、ノータンキな夫とその妻、外人パブの女、病人、介護人、クレマーなど普通の生活でのこころの葛藤を織り交ぜながら、人の愛、家族の愛、深い思いやり、やさしさ、信頼など「人間の情」を絡め、奇想天外な方法で、多くの難関を乗り越え、お互いに納得し、そして助け合い合同演奏会の開催に至るという映画であった。久々に時間も忘れて見入ってしまった。人と人が時間をかけて「こころ」を通わせ、おたがいにわだかまりの垣根を取り払うことにより、どんな難問も解決できる、あきらめるな、そのことを再度教わった映画である。

これから、「JAPIC NEWS」を介し多くの会員の方々のこころの会話を楽しみたいと思っている。



愛犬「ユキちゃん」

# Information

## 好評発売中! 「JAPIC医療用一般用医薬品集インストール版2009年1月版」

2009年1月末に「JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版2009年1月版」を発売いたしました。本インストール版は2008年12月末までの医療用・一般用医薬品情報を収録しており、各種情報の検索・閲覧、収録テキストデータを利用した院内採用医薬品集作成機能を搭載しております。

なお、本版から、提供媒体はWindows・Macintoshハイブリッド版DVD-ROM、とWindows版CD-ROMの2種類になりますが内容・価格(税・送料込15,000円)は同一ですので、どちらかをお選びください。

お得なセット割引がございますので、事務局 業務・渉外担当(TEL:0120-181-276 FAX:0120-181-461)までお問い合わせ下さい。

## 2月刊行 「JAPIC医療用医薬品集 普及新版2009」

“JAPIC医療用医薬品集”の網羅性はそのままに記載内容をコンパクトにまとめ、ご好評を頂いている“JAPIC医療用医薬品集 普及新版”の2009年版を2009年2月に発売いたします。2008年12月末までの医療用医薬品情報を収録しており、サイズをコンパクトなA5判へ変更し、更に価格を4,800円(本体価格)と値下げ致しました。

医療用医薬品集の追補版としてもご活用頂けますので、是非この機会に“JAPIC医療用医薬品集 普及新版2009”をご購入いただき、最新の添付文書情報を有効にご活用下さい。

## 2月刊行「添付文書記載病名集」ver.2.1 -医薬品の効能効果と対応標準病名-

本書は医療用医薬品添付文書の効能効果と対応する標準病名を一覧としてまとめている点が特徴ですが、本年も昨年と同様、医療用添付文書の効能効果と一致する標準病名の他、同じICD-10コード(国際疾病分類第10版)を持つ標準病名およびJAPIC病名辞書をもとに標準病名を抽出し、添付文書の効能効果との関連付けを臨床医・臨床薬剤師等の専門家に評価していただき、その結果を三段階評価で表示しております。また、新たに2007年9月21日の厚生労働省保険局医療課長通知(保医発第0921001号)による「医薬品の適応外使用に係る保険診療上の取扱いについて」の内容についてもその一部を掲載しております。詳細が決まり次第JAPICホームページ上でご案内いたします。

## JAPICデータベースの雑誌情報に全著者の所属機関を収載します

ユーザの皆様からご要望が多かった雑誌情報におけるすべての著者の所属機関収載を、2月の更新データから実施いたします。iyakuSearch、JAPICDOC、JAPICDOC速報版、ADVISEの各データベースにおいてご利用いただけます。

文書番号	著者名	所属機関
J08xxxxx まで	全員	先頭著者の所属のみ
J0900001 以降	全員	著者全員の所属

<お問い合わせ先>

医薬文献情報担当

TEL:03-5466-1822 FAX:03-5466-1836

## 「JAPIC-Q サービス」および「JAPIC-Q Plus サービス」 平成21年度の更新手続きについて

平成21年度のJAPIC-Q サービスの更新につきましては、1月下旬にユーザの皆様にご挨拶の資料をお送りいたしました。なお締め切りは2月20日(金)ですが、まだ更新手続きをされていないユーザの方は、お早めをお願いいたします。

### 第37回JAPIC医薬情報講座開催のご案内

テーマ	医療の安全対策と医薬品情報
日時	平成21年3月5日(木)～6日(金) 10:00～17:00
会場	日本薬学会長井記念館ホール (東京都渋谷区渋谷2-12-15)
定員	毎日の定員は180名
申込期限	2月20日(金)(先着順) 満席の場合はその旨ご連絡いたします。
申込方法	参加者1名ごとにJAPICホームページ掲載の入力フォームにご記入の上お申込ください。 <a href="https://www.japic.or.jp/cgi-bin/forms/seminar.cgi">https://www.japic.or.jp/cgi-bin/forms/seminar.cgi</a> 聴講券、請求書をお送りします。
参加費	1人1日ごとに1万円(JAPIC会員は5千円)



※本講座は(財)日本薬剤師研修センター認定研修対象です。(1日3単位)

#### プログラム

3月5日(木)	10:30～10:40	(財)日本医薬情報センター(JAPIC)理事長挨拶	
	10:40～11:40	医薬品の安全対策と最近の話題	厚生労働省医薬食品局安全対策課 課長/森 和彦 先生
	11:40～13:00	(昼食)	
	13:00～14:00	重篤副作用疾患別対応マニュアル(過敏症)	独協医科大学呼吸器・アレルギー内科講師/平田 博国 先生
	14:00～15:00	医薬品安全性情報と大規模副作用症例データの解析	国立医薬品食品衛生研究所 安全情報部部长/森川 馨 先生
	15:00～15:20	(休憩)	
3月6日(金)	15:20～16:20	重篤副作用疾患別対応マニュアル(薬剤性肝障害)	東京医科大学霞ヶ浦病院消化器内科教授/松崎 靖司 先生
	10:00～11:00	精神科専門薬剤師として	常盤病院薬剤部/馬場 寛子 先生
	11:00～12:00	病院薬剤師の新たな業務展開	日本病院薬剤師会会長/堀内 龍也 先生
	12:00～13:00	(昼食)	
	13:00～14:00	医薬品医療機器総合機構における医薬品安全対策について	(独)医薬品医療機器総合機構 安全部長/三澤 馨 先生
	14:00～15:00	医薬品研究開発とファーマコゲノミクス	武田薬品工業株式会社 医薬開発本部長/宮本 政臣 先生
3月6日(金)	15:00～15:20	(休憩)	
	15:20～16:20	化学・生命研究倫理と医薬品規制	行政書士(元厚生省医薬安全局 審査管理課長)/平井 俊樹 先生

\*講師の先生、時間、演題は変更することがありますのでご了承ください。

\*展示:3月5～6日 2日間 10:00～17:00まで 長井記念ホールロビーにて開催します。

## 医薬品情報ナビに海外添付文書情報などへのリンク先を追加しました

現在、JAPICホームページの「医薬品情報ナビ」は、医療用医薬品の「医薬品名(商品名)」からその製造・販売または発売会社のホームページに、またJAPIC提供の医薬文献データベース「iyakuSearch」の検索結果や、「添付文書PDF」に直接リンクできます。

この度、さらに「海外添付文書情報」、「海外医薬品集」、「海外文献情報」、「患者向け医薬品情報」、「臨床試験」、「化学物質・中毒情報」、「健康食品情報」などの無料サイトへのリンク先を追加しました。関連サイトの閲覧が可能となりました。ご活用ください。



# トピックス TOPICS

## JICAインドネシア研修者来訪

昨年12月18日(木)午前国際協力機構(JICA)主催の研修でインドネシア行政官2名の来訪がありました。JAPICの組織、医薬情報関連の業務の紹介、情報検索のデモンストレーションを行った後図書館の見学も行いました。今回は日本国際協力センター(JICE)のインドネシア語の通訳の方が同行したこともあって、例年とは異なり多くの質問が寄せられ大変活発な研修となりました。特に日本の添付文書については提供方法を初めとして多くの質問がありました。また討議では日本とインドネシアの医薬品の比較を初め保険制度、院内薬局の活動、調剤薬局や、果てはインドネシアの薬剤師教育にまで及びました。日本では都内某大学病院の薬剤部を見学したようですが、そのシステムや投与過誤を避けるための取り組みが最も印象に残ったようです。インドネシアでは薬局で処方せん薬とOTC薬の薬剤師による取り違いを避けるために包装に各々赤と緑のマークを入れているとの話も出ました。お二人とも同国政府厚生省の局長と課長で且つ薬剤師ということで、質問・討議の過程から同国の医療制度の増進・改革に強い意志を持っていることが伺えました。(MY記)



## 臨床試験情報 (JapicCTI) の運営の経緯

JapicCTIは運営を開始して3年半が経過し、2008年10月にはWHO Primary Registryとして認定されました。本年4月からは「臨床研究に関する倫理指針」が施行され、臨床研究の公開の動きが加速されるものと思われまます。JAPIC NEWS No.296(12月号)にも報告いたしましたが、2008年10月に説明会を開催し臨床試験情報の公開に関する現状等の講演を行いました。本稿では、JapicCTIの運営の経緯についてご説明いたします。臨床試験の公開に関する具体的な内容につきましては参考文献、関連サイトの項をご参照ください。

### 1. 運営の経緯

臨床試験の登録と公開については、出版バイアスの低減、倫理面の配慮(ヘルシンキ宣言の遵守)、適切な被験者募集などの面から、その必要性が指摘されてきた。

2004年9月10日には、医学雑誌編集者国際委員会(ICMJE)が公的な登録システムに登録しておかなければ論文として掲載しないという臨床試験の登録に関する共同声明を発表した。1ヵ月後10月7日には米国議会に登録公開制度についての法案が提出され、EUにおいては指令により設置されたデータベースEudraCTの一般への公開が検討され、2003年10月から登録システムについて検討を開始したWHOは各国政府代表に呼びかけてニューヨーク、メキシコで2004年10月、11月に国際会議を開催し、登録必須項目の案がまとめられた。

このような状況にあってJAPICは医薬品に関する様々な情報を収集し提供している財団法人として、2005年1月には専門家を招き本件に関する情報を収集し、臨床試験情報を取扱うことの検討を開始した。また、同月、厚労省においても有識者を招いてbrain stormingが開催され、2月には大学病院医療情報ネットワーク(UMIN)が設置予定の登録システムについてシンポジウムを開催した。

日本製薬工業協会(JPMA)では国際製薬団体連合会(IFPMA)の方針を2005年1月に共同声明として発表し、公開の方向を明確にした。また、雑誌等の発表においても、情報公開の場としては第三者の公益法人が有力であり、例えばJAPICのようなところを想定するとした。

JAPICは、JPMA、医療関係者等との検討を重ね、2005年7月1日から臨床試験情報の登録サイトJapicCTIの運用を開始した。

JAPICが臨床試験情報の登録と公開用サイトを運営するに当たって、JAPICの基本的考え方と具体的な取組みについて、2005年6月1日に開催した『臨床試験情報

JapicCTI説明会』にて当センター理事長が説明した挨拶文を臨床試験情報のトップ頁にリンク情報として掲載している。

「重要なことは、この登録は任意であり、登録し公開する内容も登録する方がご自分で判断して登録内容を決めることです」と述べている。

その後、JapicCTIはIFPMAのポータル(日本語でも検索可能)、国立保健医療科学院のポータル(UMIN、JMACCT、JapicCTIを検索)へも対応しており、JAPICの医薬品情報データベースiyakuSearchのほか、これらのポータルからの検索も可能になっている。

当初は臨床試験情報を公開することを目的としたものであったが、登録者からの要望もあり、2007年3月、ICMJE関連雑誌への投稿資格のあるサイトとしての認定審査をICMJEへ申請した。丁度その時期にICMJEは個々のサイトの投稿資格認定をやめ、WHO Primary Registryとして認定されたサイトに公開すれば、これら雑誌への投稿を認めるとしたため、JAPICでもWHOが求める20項目を登録できるようシステムの改修を行うこととし、WHOの求める項目が登録できるサイトとして2008年9月1日にリニューアルした。10月にはJPRN(Japan Primary Registries Network : UMIN、JMACCT、JapicCTIの連合体)がWHO Primary Registry(WHOPR)として認定され、これによりJapicCTIもICMJE傘下の医学雑誌への投稿資格があるサイトとして認められた。2008年10月22日に開催した「臨床試験情報 JapicCTI説明会—WHO Primary RegistryとICMJEに対応したシステムの改修について—」では、厚労省医政局研究開発振興課、JPMA、JAPIC担当者からこれらの状況を踏まえた講演と説明を行った。今後、登録者には、JapicCTIがWHO PRに認定されたこととICMJEとの関わりについて理解してもらおうと共に、状況に応じて対応してもらおうことが必要になった(この内容については「JAPIC J」2009年5月号に掲載予定)。

## 2. 臨床試験情報の登録と公開に関するJAPICの活動

- (括弧内はJAPIC外部の主な動向)
- (2004/9/10 ICMJEが共同声明発表)
  - (2004/10 米議会FDCA改正案提出、臨床試験登録と公開の義務化を提案)
  - (2004/10-11 WHOニューヨーク、メキシコ会議で登録必須項目案策定)
  - 2005/1 医学専門家を交えた研究会議開催
  - 2005/1 JPMAとの検討会を開催し、登録方法内容について意見を交換。以後必要に応じて検討会を開催
  - 2005/1 厚労省にて有識者によるBrain storming開催・出席
  - (2005/1 JPMA、IFPMAの共同声明を発表)
  - (2005/2 UMIN、登録サイトの説明会開催)
  - 2005/6/1 JapicCTIに関する説明会開催(JPMAと共催)
  - (2005/6/1 UMIN臨床試験登録システム公開開始)
  - 2005/7/1 JapicCTI登録、公開を開始
  - (2005/12 (社)日本医師会治験促進センター臨床試験登録システムJMACCTの公開開始)
  - 2006/1 IFPMAの臨床試験検索ポータルへ対応、2月20日から英語、日本語でポータルからの公開開始
  - 2006/2/23 JapicCTI試験結果の登録に関する説明会を開催(JPMAと共催)
  - 2006/3/1 JapicCTI試験結果の登録、公開を開始
  - 2006/11 国立保健医療科学院の臨床試験ポータルへ対応(UMIN、医師会、JAPIC三者のポータルサイトとして2007.10月本格公開)
  - 2007/3 ICMJEへ傘下医学誌への投稿資格について審査依頼
  - (2007/6 ICMJEがWHO PRを投稿資格サイトとする声明発表)
  - 2007/7 厚労省研究開発課より日本のWHO PR推薦に関して連絡有。
  - 2007/7 上記と同時期、ICMJEより、今後資格審査は行わず、WHO PRを投稿資格サイトとすることにした旨6月に声明を出したとの連絡有。
  - 2007/8 JapicCTIへの登録は企業による治験が多く、ICMJEのいう登録サイトでないことで生じる問

- (2007/9 米FDAが臨床試験の登録を義務化(FDCAの改正))
- 2007/11 厚労省医政局研究開発振興課にて登録サイト三者(UMIN、医師会、JAPIC)会合、厚労省からネットワーク体JPRN(Japan Primary Registries Network)としてWHO PRとなることの提案有。JapicCTIはWHOが求める20項目を登録できるようなシステムの改修を行うこととした。
- 2007/11/30 WHO PR会議出席
- 2008/8/7 厚労省医政局研究開発振興課にて登録サイト三者(UMIN、医師会、JAPIC)、WHO PRについて会合。WHOはJapicCTIが20項目を設定すれば、「ネットワーク体JPRNとしてWHO PRとなることを了承する」との連絡有。
- (2008/7/31 「臨床研究に関する倫理指針」改定で、臨床研究の実施に際し公開を義務づけ、登録サイトとしてUMIN、JMACCT、JAPICを指定(2009/4/1施行))
- 2008/9/1 JapicCTIを改修(WHO20項目の設定、検索項目の拡大)。登録者自らが登録を実施する仕組みとした。
- 2008/9/11 厚労省からWHOがJapicCTIを確認したとの連絡有。
- (2008/9/29~30 WHO PR会議 厚労省、UMIN出席)
- 2008/10/16 WHOがJPRNをWHO PRとして認定。JapicCTIがWHO PRの一員となる。
- 2008/10/22 JapicCTI説明会「WHO Primary RegistryとICMJEに対応したシステムの改修について」開催(JPMAと共催)

## 3. JapicCTI登録の留意点

JapicCTI運営に際し、一部の登録内容、登録者の確認および登録情報の担保のために留意した事項は以下の通りである。

### 1) 登録内容

JapicCTIの検索は無料(ICMJEの要件)、登録については当面無料とする。

JapicCTIへの臨床試験情報の登録内容については、



WHO、Clinical trial.govの登録内容等を参考にし、医学専門家、JPMA等関係者と協議し決定した。2008年9月1日改修においては、WHOの20項目を登録できるよう従来の項目に3項目(簡易な試験の名称、副次的評価項目、科学的な問合せ先)を追加し、再編成した。

JapicCTIがWHO PRとして認定されたことにより、ICMJE傘下の医学雑誌に投稿を希望する場合には、WHOの求める20項目を記載する必要があることに留意する必要がある。

登録内容については、知的所有権の問題および試験実施施設のように当事者に許諾を得る必要があり実質的に記載できない項目がある。目標症例数、試験実施施設、予定試験期間、用法用量については、本システム稼動時においては、当面記載が難しい項目とされ、当初は「当面記載しない」としていたが、2008年9月1日の改訂では「当面記載しない」は削除した。用法用量や対象疾患等は特許の対象となりうるものであり、本データベースへの記載は、全て公知となることに留意する必要があると思われる。また、当初は各項目について、記載している登録と記載していない登録があって比較されるのは困るとの意見があり、検索結果の表示には、記載のある項目のみが表示されるようにした。しかし、JPMAとの検討により、2008年9月1日の改修では、記載の有無に関わらず全項目を表示することとした。また、薬事法の広告規制に抵触することへの懸念があったが、当センターと厚労省医薬食品局監視指導課との話し合いにより、トップ画面に宣伝広告ではない仕組みを設置した。

## 2) 登録者の確認

代表者の署名捺印がされたシステム利用登録表を郵送にて行い、システム利用のためのID番号を郵送することにより、登録者の確認を行う。以後の手続きについてはネット上で実施する。登録要領、登録システムの利用はシステム利用申請者のみが見られるようし、登録者の確認と同時に悪戯の登録を排除するようにした。

また、登録に際し、治験については治験計画届出の有無、治験届出番号、臨床研究についてはIRBに関する事項の記述を必須としているが、これら情報は非公開である。

## 4. 参考文献等

1) 森 和彦{(独)医薬品医療機器総合機構}臨床試験の登録公開制度—医学雑誌編集者国際委員会(ICMJE)の声明を受けて—日本の薬事制度における臨床試験制

度の公表について、臨床評価2005;32:7-13.

2) 魚井 徹(日本製薬工業協会 医薬品評価委員会)臨床試験の登録公開制度—医学雑誌編集者国際委員会(ICMJE)の声明を受けて—臨床試験の登録と試験結果の開示について、臨床評価2005;32:15-24.

3) 佐瀬 一洋(国立循環器センター)臨床試験の登録公開制度—医学雑誌編集者国際委員会(ICMJE)の声明を受けて—臨床試験の登録と公開—医療機関の立場から—臨床評価2005;32:25-36.

4) ICMJE共同声明:De Angelis C,et al. Clinical trial registration :A statement from the International Committee of Medical Journal Editors. JAMA 2004Sep;292(11):1364-4.

(ICMJE声明のその後の変更等は以下のICMJEホームページから閲覧できる。)

## 5. 関連サイト

UMIN : <http://www.umin.ac.jp/ctr>

JMACCT : <http://dbcentre2.jmacct.med.or.jp/ctrtrialr/>

JapicCTI : <http://clinicaltrials.jp>

国立保健医療科学院 : <http://www.rctportal.niph.go.jp>

IFPMA : <http://www.clinicaltrials.ifpma.org>

厚生労働省医政局研究開発振興課治験推進室  
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2008/10/tp1017-1.html>

WHO : <http://www.who.int/ictrp/en/>

ICMJE : <http://www.icmje.org>

(文責:事務局業務・渉外 太田福子)

## 薬局薬剤師の職能とは



(株)黒沢薬局 (埼玉県鴻巣市)  
開設薬剤師 黒澤 章 (Kurosawa Akira)

都心からほぼ50kmのこの地に、先代の家業を継ぐ形で薬剤師として仕事を始めてから、ほぼ30年が過ぎようとしている。この間、薬局開設距離制限の時代から、医薬分業60%時代が変わってきたように、当薬局の業務も、卸売り主体の時代から調剤主体の時代に、世の中の流れの中で移り変わり、現在は市内5薬局で、調剤とOTC販売を主体に営業を行なっている。元旦から、支店で薬剤師としての業務を行なっているが、今までの経験を踏まえ、開局薬剤師として感じるところを、以下に綴ってみたい。

### ● 開局薬剤師は医療人として認められているか？

分業が始まる以前は、法律上はともかくとして、残念ながら医療人とは、認識されていなかったであろう。薬や健康食品を乱売し、医療の質をおとしめる業務をしている薬剤師とは、他の医療人の人達は席を同じくしたくないという気持ちがあったと思う。乱売合戦から手を引き、医薬分業の時代となっても、その流れは残っている。たとえば疑義照会、「処方箋の記載事項に疑わしい点があるときは、処方医に確認すること」となっているが、診療所等に電話しても処方医がでてくれるケースはまれである。伝言ゲームのように、受付者が引き継いでくれるのならまだ良いが、医師でない電話口に出た者が独自の判断で回答するケースすらある。たまに医師に回してくれるケースもあるが、そのような時はその病院、診療所の教育に喜びを覚える。きっと、その施設の院長または薬局長は、医療安全の立場から開局薬剤師のことに理解がある先生に間違いはないと思うからである。

また、処方の内容について、確認の文書を医師にお届けすることがあるが、小生がお届けした中で、誠に残念な風景を見たことがある。その文書に目を通した後で、目の前でその

ままゴミ箱に捨てたのである。記入した薬剤師や持参者をバカにしているし、何より個人情報保護法違反である。おそらくその医師は、そんな事は百も承知だということを表したかったのだらうが、薬剤師でなく医師からの文書ならば、そのようなことは出来まいと思う。

### ● 薬剤師に期待されていたこと

読者は既にご承知と思うが、長い間医師は医療ピラミッドの頂点に君臨してきた。医師を長とし、看護職や薬剤師を含めたパラメディカルは、忠実なイエスマンとしての活動が求められてきた。処方箋が院外となってもこの流れは多くは変わっていない。医師は、門前薬局は自身の診療所の為につくられた医療保険制度上で認められた付帯施設と思っている。だから、その薬剤師は処方医の意向を十分に把握し、医師の処方のクセをできるだけ早く見抜き、それに従わなければいけない。いちいち照会する薬剤師は、気の利かない薬剤師というレッテルを貼られてしまっていた。本来、薬物という異物の使用について、ブレーキをかけねばならない薬剤師が、本来の職能を発揮してこなかった悪癖が今となっても残っている。

## ● 患者は薬剤師に何を期待しているのか？

門前薬局とかかりつけの薬局では、少し違うかもしれない。しかし、患者は、薬剤師には医師と違うことを期待しているはずだ。例えば、これから服用する薬の色、大きさ、味、飲みやすさ、使いやすさ、保存性、飲み忘れたらどうなるか、他の薬と一緒に飲んでも大丈夫か…etc。

患者が、家で服用した後に、万一変わった症状が起こってしまった時に、まず薬剤師に聞くだろうか？患者は、薬剤師は自分の体には全く触っていないのだから、症状の変化について聞いても分からないと、賢い患者は考えるであろう。

もちろん、病理学や生理学の知識も必要であるが、それらは医師の専門分野で、我々に求められている知識は、無機的な薬剤の性状の解説とその適切な使い方、又それが有機的な体に及ぼす影響と、他の薬や食物等も含めた相互作用の知識とその解説ではないだろうか。

後発品にしても然りであろう。製剤学的な同等性が担保されているとすれば、患者さんに、ほぼ同等な体内動態を解説するよりも、薬剤の色、大きさ、味や使い勝手とともに、包装(PTP等)の違いに至るまでより詳しく、先発品との違いを解説する必要がある。多くの後発品の中から、推奨できる品目を吟味し、その薬局で、それを選択した理由を、十分に患者さんと医師に説明しているだろうか。

即ち、厚労省は生物学的同等性について図表等を用いて患者に説明することを求めているが、それは製造と薬価収載を承認したお上が管理すべき事項であるから、薬剤師はそれを前提とした説明で足りるはずである。

## ● 医療提供施設として薬剤師は何をすべきか？

薬局は医療提供施設として、十分な機能を備えているだろうか。投薬口と待合椅子はあるが、バリアフリーの施設、手摺、車椅子、老眼鏡、気分の悪い人が待つことができる設備のほか、注射針等の医療廃棄物の受入、夜間休日等への十分な対応等、取り組むべき課題はたくさんあるであろう。昨今医師の診療拒否が問題となってきたが、薬剤師はそれ以上に甘えている。門前薬局は診療所の診療時間のみで調剤所と化し、たとえその診療所に急患が来ても開けることはなく、院内または他の薬局に一方的にすがっている。少なくとも薬剤師は、管理者はもちろん勤務者も携帯の電話番号を、診療者側と共有し、情報の流通

化をすすめるべきである。さらに薬局の開設許可は、各県薬務課の管轄となっているが、医療提供施設となった今日、医療法も考慮すると、公衆又は特定多数のため調剤に供する場所であるから、門前の診療所に特化した調剤所でなく、どのような患者であっても受け入れられる公衆衛生機能も備えた施設になっていなければならないであろう。

## ● 薬剤師は薬物療法の最終責任者

残念ながら薬剤師は、まだ医療人としては、十分に認められていない。それは、薬剤師が、医師の管理下から独立していないことを多くの人が感じとり、我々もその地位に甘んじているからだ。

処方箋について前回までの薬歴と添付文書を参照して監査し、薬剤の用法用量等は適切か、無駄な薬は出ているか、患者さんは薬を適切に服用でき、困っていることはないか等、薬剤師が確認すべき事項はたくさんあると思う。

医師には、特に物理的・化学的な立場から、必要な意見を具申しなければいけない。また今日の長期化した処方箋では、特に初回や処方変更後では、患者さんに適宜電話等により、適切な服用ができていないか、予期せぬ症状が起こっていないか等を確認せねばならない。これは、医療安全の立場からも重要である。OTCについても同様で、大包装品やまとめ買いのお客様には、不可欠のフォローであろう。

薬剤師は、お渡した医薬品について、患者さんが医師の処方設計通りきちんと服用出来るよう、細心の注意を払う必要がある。指示通り服用できない処方箋は、処方箋に不備があることになる。不備をそのままにして、「分からない事は医師に聞いてください」では、薬剤師として責任を放棄してしまうことになってしまう。

薬物療法で、薬剤師は最終責任者であり、価格を含め最小の量で最大の効果が得られるよう、常に考えていなければならない。医師が望む薬物療法に見合う適正な薬剤と、十分に効果を発揮する用法・用量を協議選択し、さらに最大の治療効果を得られるよう患者さんを後押ししていくことが、これからの開局薬剤師として、さらに進めていくべきことではないだろうか。



## 元気づけられる大切な言葉

バイエル薬品株式会社 ファーマコビジランス  
安全性評価プライマリーケア 金本 裕美子 (Kanemoto Yumiko)

バイエル薬品株式会社は大阪に本社があり、診断薬、プライマリーケア、オンコロジー、スペシャリティケア、ウイメンズヘルスケア等に注力しているグローバル企業です。2007年7月に旧日本シェーリング株式会社と統合し、昨年8月に西梅田に本社が移転しました。

私は2年前に国内製薬会社からバイエル薬品に転職し、現在は医薬品の副作用評価・検討・厚生労働省への報告を行っています。転職前は製造販売後臨床試験や製造販売後調査の立案・進捗管理、市販後医薬品のライフサイクルマネジメントに関する資料の作成等の業務に携わっておりました。どちらかというとアウト傾向にある私ですが、副作用評価業務に就いた当初は、報告期限管理の厳密さや、実際に患者様におこった副作用の内容を検討するという重要な業務内容に、「ちゃんとやっていけるのかしら…」と不安な気持ちでいっぱいでした。毎日医薬情報担当者から連絡される副作用報告や文献情報、海外の措置情報など、膨大な量を評価・検討し、必要に応じて当局へ報告する業務は、常に迅速・的確な対応を求められるため気が抜けません。そんな中、自分たちだけではとても収集しきれない文献・学会情報や海外措置情報を、素早く漏れなく提供してくれるJAPICのサービスには、いつも助けられています。

その一つに、毎週水曜日に送られてくるJAPIC-Qの文献・学会情報があります。現在弊社では、JAPIC-Qの情報を自分たちでモニタリングしており、私も1か月に1回ほどモニタリングをしています。学会シーズンは膨大な文献・学会要旨の量に驚きながらも、「これだけの量を自分たちだけで収集するのは難しいだろうなあ」とありがたく頂戴しています。また、JAPIC Daily Mailも海外の措置情報がいち早く入手できる貴重なツールとして、毎日欠かさずチェックしています。正直、JAPIC Daily Mailを開くときは、「うちの薬が載っていませんように…」と祈る気持ちなのですが、自社品だけでなく海外でしか発売されていない医薬品の情報や、海外規制当局の情報なども知ることができるため、広い視野で医薬品の副作用を見るいい機会を与えてもらっているな、と感じています。

さて、「広い視野」といえば、好奇心旺盛な私は自分の視野を広げるため(?)、長期のお休みがとれるとよく海外旅行に行きます。学生時代には、友人と二人でヨーロッパを貧乏旅行をしました。ポルトガルからスペインまで、長距離バスで移動したり、安宿を探して彷徨ったり…。今考えるとかなり無謀でしたが、地元の方とふれあい、その国特有の考え方に触れ、とても有意義な旅でした。また、10代の頃にアメリカへ1ヵ月間ホームステイしたことがあり、同世代の子がしっかりと自分の意見をみんなの前で述べる様子を目の当たりにし、「私も自分の考えをちゃんと伝えるようになりたい!」と強く思ったことを覚えています。社会人になった今、たとえ稚拙な意見で恥をかいても、自分の言葉で話すことの大切さを当時にも増して痛感しています。

就職してからは、長期の休暇はなかなか取れないので、旅行に行く代わりに旅行記などの本を読んだりしています。昔から大好きで何度も読み返している本<sup>1)</sup>に、ある家族のアフリカでの生活記があります。国立公園の平原のど真ん中、電気もない、ガスもない、水はたまにしか出ない、そんなアフリカでの生活で、4歳の女の子が感じたこと、発した言葉をお母さんが記録しているのですが、その一つにこんな言葉がありました。

「シマウマの子供は死んでいます。死ぬと骨になります。そして土になります。それは自然のきまりです」

日本で忙しい毎日を送っていると、人も生き物で、いつかは死んで自然に帰るんだということを忘れてしまいがちです。私はこの言葉に出会った時、「生き物はいつか必ず死んで自然に帰るのだから、辛いことがあってもウダウダ悩まず、その時その時を精いっぱい生きよう!」と背中を押してもらったような気持ちになりました。仕事で失敗して落ち込むことや、プライベートで辛い気持ちになることもあります。そんな時はこの言葉を思い出して元気をもらっています。いつか自然に帰る日まで、楽しく前向きに、そして後悔のないように、仕事もプライベートも頑張っていきたいと思います。

1) 「アフリカボレボレ」岩合日出子 新潮社



### くすり創りの楽しさ難しさ

日本製薬工業協会 研究振興部長 岡崎 靖 (Okazaki Yasushi)

くすりの由来は、植物や動物の抽出成分を基にしたもの、タンパク質と親和性のある染料などを基にした合成化合物、放線菌などが産生する抗生物質、生理活性物質の受容体や酵素に対するアゴニストとアンタゴニストをターゲットとしたものですが、このなかで近年研究者の鋭い観察力より生まれた医薬品を2点紹介するとともに、筆者が今から約40年前におこなった研究の楽しさについて述べさせていただきます。

アルツハイマー病治療薬ドネペジルのシーズ化合物は、当初、別の目的で作られたものですが、動物試験でアセチルコリンを投与したときの唾液を流す症状が観察されました。この物質はフィゾスチグミンなどのように4級アンモニウムではなく、化学構造式からはこのようなコリンエステラーゼ阻害作用を示すことは想像できません。成功の秘訣は、化合物を合成する有機化学者と生理活性を調べる薬理学者の連携がよかったことが成功に結びついたものと思えます。

高血圧治療薬のジルチアゼムも化学構造式ベンゾチアゼピンからわかるように、当初は向精神薬を狙ったものですが、研究者は薬理試験で血管拡張作用を見逃さなかったのです。当時では斬新的な考えですが、全ての新化合物に対して、研究者の先入観を排除するために化合物名や依頼者名をブラインドにして、ランダムスクリーニングをおこないました。

人は既存の考えや常識を脱却するには、かなりの努力と知力が必要と思われれます。勉強すればするほど、調査すればするほどこれらの常識といわれるトラップにはまり、そこから脱却するのに苦労する。しかし、現在の常識といわれるところまでは最低限、理解しなければその先に行くことは難しい。なんとも研究とは厄介な代物です。上記二つの成功例は明らかにいままでの方法とは違うことを研究者がおこなったことの成果と思われれます。

私がまだ大学院工学研究科の学生で、薬剤耐性に挑戦していたころのお話です。臨床現場から得られたカナマイシン耐性菌は、ある部分の水酸基をリン酸化することにより、カナマイシンを不活化することが知られていました。私たちの研究室では、カナマイシンを化学修飾することにより、これを克服することを一つのテーマとし、先ず水酸基のO-メチル化を試みました。しかし、この誘導体は抗菌力まで失ってしまい失敗でした。

そこで私に与えられたテーマはこの部分の水酸基を水素に置き換えることでした。出発物質であるカナマイシンのアミノ基を保護し、一部の水酸基を保護し、数段階を経て目的の水酸基を水素に置き換えるところまできたとき、指導教官から突然、「不純物が多くてもよいから、全ての保護基を外して、すぐに抗菌活性を調べる」といわれました。随分乱暴なことをするものだとその時は思いましたが、それは当然です。指導教官はすぐにでも結果を知りたかったのです。数段階の化学反応を精製することなく真っ黒の最終物を抗菌活性試験にかけました。一晩たった次の日の朝、シャーレを覗き込むと、なんと僅かながら阻止円ができているではありませんか。

このときの感動は今でも忘れられません。光るものはどんなに汚いものやガラクトと一緒にでも、必ずその存在を示すということです。

# 外国政府等の医薬品・医療機器等の 安全性に関する規制措置情報より (抜粋)

2008年12月2日～12月26日分のJAPIC WEEKLY NEWS(No.185-188)より抜粋

## 【米FDA】

- 带状疱疹生ワクチンZostavaxの表示改訂について(「発疹」の記載の追加など)
- Terumo Cardiovascular System製動脈カニューレTenderflow Pediatric Arterial Cannulaeの世界規模の緊急回収について
- 米FDAは、急性腎障害のリスクを軽減するため、腸管洗浄に用いられるSodium Phosphate経口製剤に対する新たな安全対策を要求(枠囲み警告の追加など)
- ジフテリア・破傷風混合ワクチンDECAVACに関する承認情報:有害事象の自発報告データなどに関する添付文書改訂
- 業界向けガイダンス(案):インフルエンザ流行(パンデミック)時の医療用製品(医薬品/生物学的製剤/医療機器)および栄養補助食品に関する市販後有害事象報告について

## 【EU・EMA】

- EMA/CHMPの11月会合(2008年11月17日-20日開催)の月間報告:Torisel(temsirolimus)、tacrolimus(Advagraf, Prograf)、抗精神病薬、Ionsys(fentanyl hydrochloride)

## 【Health Canada】

- Icodextrin、免疫グロブリン、galactose、およびd-xyloseによる特定の血糖測定器への干渉の可能性
- 中等度の肝障害および進行癌を有する患者におけるTarceva(erlotinib)の使用に関する重要な安全性情報
- Health Canada、小児に対する鎮咳・感冒薬の表示に関する結論を報告
- 糖尿病治療薬Actos(pioglitazone hydrochloride)と心不全に関する表示改訂
- Hoffmann-La Roche Ltd.のAvastin(bevacizumab)硝子体内投与の適応外使用に関する眼の炎症、眼内炎およびToxic Anterior Segment Syndrome(TASS)について

## 【英MHRA】

- 医療専門家向け医薬品安全性情報(2008年11月発行分):Raptiva(efalizumab)、MabThera(rituximab):進行性多巣性白質脳症(PML)との関連性について
- Drug Safety Update(Vol. 2, Issue 5, 2008年12月号):亜酸化窒素、rituximab、efalizumab、従来の(定型)抗精神病薬、PrografおよびAdvagraf(tacrolimus)、Norfloxacinなど

## 【独 BfArM】

- Thalidomid(thalidomide)およびLenalidomid(lenalidomide)に関する医薬品処方規則(AMVV)および薬局での取り扱い規則の改訂について
- ドパミン作動薬(Ergotamin Derivate):線維症および心臓弁疾患リスクについて
- ガドリニウム含有造影剤:腎性全身性線維症(NSF)リスクに関する報告の最新情報

## 【厚生労働省】

- 医療機器の回収命令について(ジャクソンリース回路)

## 【医薬品医療機器総合機構】

- 使用上の注意の改訂指示(平成20年11月28日指示分):ロルノキシカム、エレンタールなど
- 医薬品・医療機器等安全性情報253号(使用上の注意の改訂について(その202)):塩酸アマンタジン他、インスリンペン型注入器など:市販直後調査の対象品目一覧
- 使用上の注意の改訂指示(平成20年12月19日指示分):ネクサバール錠(ソラフェニブトシル酸塩)

JAPIC事業部門 医薬文献情報(海外)担当

## 【新着資料案内 平成20年12月11日～平成21年1月9日受け入れ】

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。この情報は附属図書館の蔵書検索(<http://www.libblabo.jp/japic/home32.stm>)の図書新着案内でもご覧頂けます。

これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館(TEL 03-5466-1827)までお越し下さい。

〈 配列は書名のアルファベット順 〉

書名	著者名	出版社名	出版年月
2009 USP 32 The United States Pharmacopoeia /NF 27 The National Formulary	USP Convention, Inc.	USP Convention, Inc.	2008年
フィブラートUpdate—幅広い使い方と新たなエビデンス—	山田 信博 編	フジメディカル出版	2008年12月
鼻アレルギー診療ガイドライン—通年性鼻炎と花粉症— 2009年版(改訂第6版)	鼻アレルギー診療ガイドライン 作成委員会 編	ライフ・サイエンス	2008年11月
医療機器の基礎知識 第2版	財団法人医療機器センター 編	薬事日報社	2008年12月
改正GCP試験ハンドブック 改訂版第2版	野口 隆志 編	薬事日報社	2008年12月
MIMS Annual 2008 (Australian Edition)	Allyson Harvey et al ed.	CMPMedica Australia Pty Limited	2008年6月
PDR 30th ed. 2009-PDR for Nonprescription Drugs, Dietary Supplements, and Herbs	Bette LaGow et al ed.	Thomson Reuters	2009年
先発・代表薬でさがすジェネリック医薬品リスト 平成20年12月版	医薬情報研究所 編	じほう	2008年12月

## 情報提供一覧

### 【平成21年1月5日～1月31日提供】

出版物がお手許に届いていない場合、宛先変更の場合は当センター事務局 業務・渉外担当(TEL 03-5466-1812)までお知らせ下さい。

情報提供一覧	発行日等	JAPIC作成の医薬品情報データベース	更新日
〈出版物等〉		〈iyakuSearch〉Free	<a href="http://database.japic.or.jp/">http://database.japic.or.jp/</a>
1.「医薬関連情報」1月号	1月30日	1. 医薬文献情報	月 1 回
2.「Regulations View Web版」No.161	1月30日	2. 学会演題情報	月 1 回
3.「添付文書入手一覧」2008年12月分(HP定期更新情報掲載)	1月30日	3. 医療用医薬品添付文書情報	月 2 回
4.「JAPIC NEWS」No.298	1月30日	4. 一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
5. JAPIC「医療用医薬品集」2009更新情報2009年1月版	1月30日	5. 臨床試験情報	随 時
〈医薬品安全性情報・感染症情報・速報サービス等〉 (FAX、郵送、電子メール等で提供)		6. 日本の新薬	随 時
1.「医薬関連情報 速報FAXサービス」No.668-671	毎 週	7. 学会開催情報	月 2 回
2.「医薬文献・学会情報速報サービス(JAPIC-Qサービス)」	毎 週	8. 医薬品類似名称検索	随 時
3.「JAPIC-Q Plusサービス」	毎月第一水曜日	〈iyakuSearchPlus〉 <a href="http://database.japic.or.jp/nw/index">http://database.japic.or.jp/nw/index</a>	
4.「外国政府等の医薬品・医療用具の安全性に関する措置情報サービス(JAPIC Daily Mail)」No.1863-1881	毎 日	1. 医薬文献情報プラス	月 1 回
5. JAPIC Weekly News No.188-191	毎週木曜日	2. 学会演題情報プラス	月 1 回
6.「感染症情報(JAPIC Daily Mail Plus)」No.274-277	毎週月曜日	3. JAPIC Daily Mail DB	毎 日
7.「PubMed代行検索サービス」	毎月第一・三水曜日	4. Regulations View DB (要:ID/PW)	月 1 回
8. JAPIC「医療用医薬品集」2009更新情報2008年12月版	毎月10日	外部機関から提供しているJAPICデータベース	
		〈JIP e-infoStreamから提供〉	<a href="https://e-infostream.com/">https://e-infostream.com/</a>
		〈JST JDreamIIから提供〉	<a href="http://pr.jst.go.jp/jdream2/">http://pr.jst.go.jp/jdream2/</a>

## 《医薬品集編集34年のJAPICがお届けする、薬剤師必携の書籍!》

標準病名と医薬品を結びつけた2つの書籍が、完成しました!!オンライン請求のレセプト点検を支援します!!



### 添付文書記載病名集 Ver.2.1

— 医薬品の効能効果と対応標準病名 —

(2009年2月版)

2009年  
2月発売

- ◆ 医薬品の「効能効果」(適応症)をICD-10の標準病名に対応させ、更に临床上使用される詳細な病名に対応。
- ◆ 対応する標準病名の妥当性を臨床医師、薬剤師により評価し、◎、○、△で分類。
- ◆ 標準病名を導入したい方や導入を検討したい方に最適です。

B5判 約1,500ページ / **7,770円**(税込)  
ISBN:978-4-903449-62-3



### 病名適応医薬品集 2008

— 病名から薬がわかる本 —

2008年  
7月発行

- ◆ 標準病名に対応する医薬品を一覧表示。
- ◆ 同義語・関連語の病名と標準病名をリンクさせた「病名・医薬品・効能効果一覧」を収録。
- ◆ 「添付文書記載病名集」とは逆の、病名から適切な医薬品がわかる姉妹書。

B5判 約1,000ページ / **7,770円**(税込)  
ISBN:978-4-903449-59-3

ジャピック  
財団法人 日本医薬情報センター (JAPIC) 編集・発行 TEL 0120-181-276  
丸善 出版事業部 発売元 TEL 03-3272-0521

上記書籍の他、電子カルテやオーダリングシステムに搭載可能なJAPIC添付文書関連データベース(添付文書データ及び病名データ)の販売も行っております。データの購入希望もしくはお問い合わせはJAPIC (TEL 0120-181-276) まで。

## ガーデン

このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。  
リフレッシュにどうぞ!!



お正月の鉢植えなどから出始め、早春の花壇で目立つ存在だが、キンポウゲ科で、強心配糖体のアドニトキシンを含むので有毒である。見るだけの花でまさかとは思いが、時に食べる人がいて、事件として報道される。強心薬と知って飲んで中毒死した例もある。(ky)

ふくじゅそう

JAPIC ホームページより  
<http://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン

Topページ右下部の「アイコン」からも閲覧できます。